

新たな査読制度の試み

Peer review on trial

Nature vol. 441(668) / 8 June 2006



Nature が手がける新たな2つのオンライン手法について

Nature という雑誌を作るにあたって私たちは、自らが主体的に取材した記事や執筆を依頼した原稿の編集を、責任をもって行うことの大切さを常に意識している。と同時に、新しい方法の模索にも常に積極的でありたいとの思いから、今回はオンラインのもつ双方向性を最大限に活用するべく、原則ぎりぎりのところで可能性を探ろうと考えた。

その1つとして最近、news@nature.com のサイトで更新を行っている日々の科学ニュース記事にブログをつける試みを始めた。成果例としてはすでに、生物進化における「ミッシングリンク」を埋めるとされる *Tiktaalik roseae* をめぐって起きた議論などが挙げられる (http://blogs.nature.com/news/blog/2006/04/the_fish_that_crawled_out_of_t.html 参照)。

ブログがジャーナリズムにとって代わる可能性は低いが、ブログは今後もおそらくジャーナリズムを補完する形で貴重な役割を果たしていくだろう。そしてこれよりもさらに成り行きの読めないのが、Nature でスタートさせた一種の公開査読制度の試験運用がもたらす結果である。この試験運用に伴って、査読に関する一般参加のオンライン討論も行われる (www.nature.com/nature/peerreview/index.html 参照)。

数か月を予定している試験運用の期間中、Nature では従来どおりの査読方法、つまり全投稿論文のうち編集部が選んだ論文を通常2人か3人の専門家に送って行う匿名査読も継続していく。私たちは、現行のこの査読方法はうまくいっていると考えている。だが一方で、6月上旬から数週間にわたって行うウェブ上での議論では、そのほかの査読方法の可能性を探り、また従来の科学誌がもつさまざまな機能をオンラインで展開できるような技術の可能性、それに査読の倫理性などについても問いたいと思う。

オンラインで公開査読を行うという今回の試験運用により、投稿論文の著者は希望に応じて、現行の査読方法と共に両方の査読を並行して受けることができるようになる。査読に廻されることが決まった投稿論文には今後すべて、まずは従来のプロセスが適用される。そのうえで著者は、投稿論文の原稿を公開のウェブサイト上に掲載することにも同意できる。その論文原稿に対してはその後、氏名を明らかにすることを

条件に、誰でもオンライン上でコメントを寄せることが可能となる。そして、Nature の編集者があらかじめ依頼しておいた匿名査読者のコメントをすべて受け取った時点で、公開ウェブサイトにおけるコメントの受け付けを締め切り、提出されたすべての意見に対し、編集者と著者で検討していく。

この公開手順は、投稿論文の初稿にのみ適用される。論文原稿の受理・不受理がいったん決まった後は、公開ウェブサイトに寄せられたコメントを編集者が閉鎖的プロセスで評価していく。

試験運用は数か月にわたって行われる。該当する論文原稿に関する最終決定がすべて完了した時点で、Nature は受け取ったコメントを全体的に評価し、同時にそれらのコメントを正当に扱うために必要となる作業について検討を行う予定だ。その結果は Nature 誌上で報告し、現在の査読手順を適切に変更すべきかどうかを考えたい。現時点では、その変更はおそらく Nature の既存のプロセスを補完するものにとどまり、代替するものにまではならないと予想している。

今回は熟慮のうえ、「実験」ではなく「試験運用」という言葉を使うことにした。実験となれば、公開査読に取り組む根本的なメリットとデメリットを明らかにする必要があるが、私たちはそこまでの大それた野望をもっているわけではない。ただ、新しい方法がどうなるのかを探りたい。論文著者を対象に行った最近の調査でも、この新しい考え方には十分な関心が得られ、試験運用をするだけの価値のあることが示されている。

Nature の公開ウェブサイトに掲載してコメントを受けつける論文は当然、一般にアクセスする人々やジャーナリストによる格好の批判対象となるだろう。メディアによる先行報道は論文の受理に際して不利にはならない。しかし、査読を受けていない論文にはそれなりのリスクがある点は、ジャーナリストもおおい理解していくことになるはずだ。

Nature および発行元出版社では今回も、これまでと同様、オンラインのもつ可能性を探り、それを拡大しようとしている。しかし、私たちが核として掲げる目標に変わりはない。すなわち、自分たちの編集技能によって提供できるかぎりにおいて、今後最も刺激的なコンテンツを読者に届けていくことである。